

スウィート・ビター

これは私と家内でやっている喫茶店での話だ。うちの店に来るお客の中に、ある老人がいた。彼は今までこの店に来た中で一番不思議な人であった。

べつに、彼の性分や容姿がへんなのではない。彼は毎日きちっとした身なりで、ああ、年季が入っているが物がよい帽子を欠かさずかぶっている。午後三時頃になるとふらりと店に現れ、店の一隅の席に座るのだ。私が勝手に“彼の特等席”と言っているその席からは、四季折々の美しい草花が、特に春になれば、見事なバラ園が望める。彼は温かい紅茶とレモンケーキ、たまにアップルパイをいただきながらその景色を何時間も眺めている。よって私は彼のことを“レモンケーキ男”と呼んでいるのだが。それはさておき、彼はこの生活を実に五年も前から続けているのだ。彼はどうして私の店に、あの席に、毎日同じものを注文して、何をしてもなく外の景色を眺めているのか。私はこの五年間ずっと考えていた。もちろん一日中ではない。彼が店に来ている間の話だ。素直に本人に聞けばよいことだろうが、それでは面白くないだろう。皆は私のことを「このおっちゃんにはヒマ人か!」と思うかもしれない。しかし、訪れてくる客の個性とは、ずうっと店にいる私にとって外部からの良い刺激なのである。だから彼がレモンケーキをほおぼるのを眺めながら、彼という人間について考え悩むのもそう悪くはないのさ。

そして、そんな私の不思議な人間観察のおかげで、その謎めいた理由も少し分かりそうなのである。

まず彼は店の定休日を除く日で、年に一度だけ店に来ない日がある。始めのうちは、たまたま予定が合わなかったのかと思っていたが、二年も経てばそれが意図して来ない日なのだと分かった。

ちようど、店の庭がコスモスでいっぱいになる頃である。

そして、これもまた一年に一回だけであるが、彼は泣くのだ。毎年いきなり泣き出すので、私と家内はびっくりさせられている。彼はいつもの特等席に座ると、まだメニューを注文していないのに、ぼたぼたと大粒の涙を流したり、食べ終わると周りが気づかないくらい静かにすすり泣いたりしているのだ。なので、その日ばかりは、心配性の家内でなく、私が注文をとりに行かねばならないのだ。ちようど、うちの庭の薔薇が咲く頃である。

しかし、ここまで来て新たな問題が発生した。一か月ほど前から彼はバタリと店に来なくなったのだ。彼が店に来るようになってから、そんなに長く来ないのは初めてであった。

不意にテラスをつなぐ窓が開いた。

「あなた、お昼ごはんですよ」

家内が言った。

「おや、もう時間か」

時計を見るともう十一時前であった。

「あと、三十分もすればお客が来るでしょうから、早めに昼食を済ましましょうか」

テーブルの上にはカレーが置かれていた。おそらくメニューの分量よりも大幅に作りすぎたのだろう。因みに、うちの店のカレーは牛筋カレーと決まっている。なぜかって？ 私が牛筋カレーが一番好きだからだ。

家内と何気ない話をしながらのんびりと昼飯を食べる。こういう時にふと思う。腹に流し込むように食べた会社勤めの頃の昼飯とは全く別物に感じるなあ、と。

カレーを食べべ終わり、いつものようにキッチンへ向かおうとする、家内に呼び止められた。

「ちよつと座っていてください」

「おいおい、時間がないんじゃないのか」

「いいから座って待ってなさい。すぐに済むことだから」

そう言つて家内はキッチンへ行つてしまった。そう言われると、おとなしく座っているしかない。

本当にすぐ家内は戻つてきた。手に持つているお皿と一緒に。

「新作のデザートを作つてみました。よく考えてみると、店を始めてから今まで同じデザートだったでしょう」

そう。うちの店のデザートはオーブン以来ずっとレモンケーキを出してきた。ふんわりと焼き上げたケーキに、アイシングをかけ少量のピスタチオを飾る。そんな特製のケーキを目当てにしてやつてくるお客も少なくない。レモンがなかなか手に入らない時はアップルパイを出すことはあつたが、メニューを変更することはなかった。それは、私がと言うよりは、家内がそうしたくなかつたのだ。だから、その家内が今言つたことは、私の中で大いに驚くべきことであつた。

「急にどうしたんだ？」

「え、だめでしたか？」

「いや……そういう訳じゃないが」

「まあ、とりあえず食べてみてくださいよ」

私はそれを丁寧にフォークで切つて、口に運んだ。

「タルト・オ・シトロンです。でも、上はムースにしたので店のオリジナルデザートです」

「ムースか、なかなかいいじゃないか。でも、レモンカードには少量だけレモンピールを入れたほうがいいと思うけどね」

「ああ、確かに。その方がいいわね」

「でも、本当にこれにするのか？」

家内は体も顔も庭の方に向けていた姿勢を変えないまま、ぽつりとつぶやいた。

「ようやく決心がついたので」

「……は？」

今度は私の方に向きなおして話し始めた。

「あなたが、以前から気にかけていたお客様がいたでしょう？ ほら、なんでしたっけ、レモンケーキおじさんとか言つていた……」

実は私、昨日その方に会つたのです。それで、彼といろいろ話して、私もすっかりしないとつて思いました。以上」

家内は何かを悟つたような顔をしていた。私は試作のケーキを食べていた手を止めた。

「思いました。つてそんな言い方させてもなあ」

「……………」

家内は昔からこうだ。突拍子もなく悟りを開く。きつと私から何かあつたのか？ と聞かなければ永遠と黙つているだろう。あまりにもスツキリとした顔をして黙るものだから、私が勝手に悟りを開いたと言つていただけだ。本来の悟りとは少し違つたろう、あまり気にしないでくれ。まあ、そんな細かいことはどうでもいい。とりあえず何があつたかを、この目の前の美和子如来像（これも私が勝手に命名）に聞いてみよう。因みに、家内は怒ると美和子不動明王になるので注意が必要だ。

「分かつたよ。あのお客に会つたんだな。それでお前は何か知らないが決心したと。おお、良かったじゃないか」

「なんですかその言い方は！ 私は真剣に話しているのに！ 『お、そうだったのか！』で、どこで会つたんだ？』 くらい言えないのですか？」

おつと。早くも美和子如来像から美和子不動明王になつてしまつた。それにしても、彼とどこで会つたか聞けと言われても……

エスパーじゃないから無理だろう、それは。

「悪かつた、悪かつたよ。それでどこで会つたんだ？」

「病院です」

「病院？」

ああ、それで一週間も店に来なかったのか。私はモヤモヤが一つ消えて少しすっきりした。しかし、病院とは驚いた。

「私もびつくりしたわ。だつて友人の見舞いに行ったら、『こんにちは』って言われて振り向いたら横のベッドに彼がいたんですから。向こうから挨拶してくれなかったらきつと気付かなかつたわ」

「彼は入院しているのか。どこか悪いところでも……」

「そう、そう思つてね。でも、そういう時つてプライベートなことは聞かない方がいいでしょう。そう思つてたら彼の方から『久しく、お店に行つてませんか。申し訳ない』つて言ったのよ」

「彼は何で謝つたんだ？」

すると家内はどこか寂しげな顔をした。

「ここからは私が彼から聞いた話になります、

『どうして僕がここにいるのかとお思いでしょう？ どこから離せば良いのか突然で申し訳ないが……僕には妻がいました。結婚が遅かったので、僕たちには子供はいません。その妻には五年前に先立たれました。彼女は癌でした。そして僕も同じ病気になる。まつたく、何の運命でしょうか……生前、妻がよく通つていたのがあなた様の喫茶店でした。いつしか僕も一緒に行くようになり、そしてそれが私たちの楽しみになつていきました。あのころの僕は自分の見た目に非常にうるさかった。今みたいな白髪じゃなくて、自分は死ぬまで髪は染め続ける！ とか、服はこの店でしか買わない！ とか言つて。妻はそんな僕をいつも笑つていました。僕はずつとこんな平凡で幸せな日々が続くのだろうと思つていた。しかし僕と一緒に健康診断に行った時、彼女が病気になることが分かりました。そして、その年の春には大きな

手術を受けることになりました。彼女の手術前に最後に二人であなただの店に訪れた時、彼女、僕に花をくれたんです。しかも、まだ蕾つぼみの赤い薔薇でした。本当に突然のことだったので僕が驚いていると、彼女はくすくすと笑つて、——そのバラには花言葉があつてね、意味は“純潔、あなたに尽くします、純粹な愛”で、蕾には愛の告白つていう意味があるんですつてよ。あなたは私と一緒に私の病気に懸命に闘つてくれてるわ。でも、分かつてるんでしよう？ 私はもうそんなに長くないつてこと。自分でこんなこと言つと、悲しくなつちゃうけどね。だから私の気持ちをまだ元気なうちと思つて薔薇に託してみちゃいました。だつて、こうしないと私と付き合う前のあなたつて結構遊び人だつたんだから、私が死んだ後にちやつかり新しい奥さんをつつて、ノホホーンと暮らしてそうなもの！ もし本当にそうなつたら空から雷落としてあげるわ。あははははは——

妻が僕にくれたのは薔薇でしたが、彼女はコスモスが一番好きでした。もしかして逝く時期をコスモ스에合わせたのでしょうか。その年の秋に妻は逝つてしまいました。最期はとても苦しんでいて、見ているのが辛かった。そしてある日の夕暮れに妻は僕の方を見てにつこりと笑つてそのまま……そのまま。僕はいつも墓参りにコスモスを持っていきます。そして一日中墓の前で見えない彼女を想つて話しかけるんです。人は大切なものを失つて初めて気が付く生き物だと言いますよね。でも僕が思うには、僕は彼女を失う前から大切に思つていたし、確かに彼女が逝つてしまつてから増々恋しく思うけれども、大切である気持ちはずつと変わらない。彼女がいてもいなくても僕の気持ちはずつと一緒なのです。きつとそう思えるのは、あの赤い蕾の薔薇のおかげでしょう。彼女もどこかで僕を想つてくれていて。もう泣き腫らすのはやめよう、と。そう思つた矢先、今度は

自分が癌になるなんて。年も年だからなあ、親しい友人はみんなもういない。きつと僕は誰にも看取られることなく、ひとり寂しくこの病院の隅で静かに死んでいくのだろう、と。でも、まさかあなたとこんなところで会って、僕のくだらない話を聞かせるなんて。うわはは。こりゃいい冥土の土産になりそうだ。いやあ、長々と申し訳なかった。ご主人にはよろしく言っておいてください……あと、ジジイ観察はほどほどに！ って』

最後の方は私も一緒になって笑っていたけど、途中まではボロボロ泣いてしまいましたよ。彼が、五年も経つ今も、どれほど亡き奥さんのことを想っているのかと考えると……もう私は胸がいっぱいよ」

私は家内の話を聞いていたのだが、しばらく言葉を発しなかった。良い言葉が見つからなかったのだ。家内に対しても、彼に対しても。私は、彼という人物の謎が解けたことはすごくスッキリとした。しかし、謎なままでもよかったのではないか。そう思うと、少し後悔した。

「なるほど。彼が墓参りに行っているから店に来ない日があったり、泣いている日は昔、きつと彼の奥さんとうちの店に来た日なのだろう。そして、ここ最近、彼が来ないのは……癌ということか」

「話していても、時折辛そうにしてたわ」

「そう、か」

しばらく何も無い時が流れた。

そしてふと思いついた。

「そうだ。おまえ、さつき何かを決心したって言っていたが」

「ああ、千花のことですよ」

千花とは、うちの一人娘のことだ。

「あの子が天国に行ってから、何年が経ちました？」
突然の質問だった。

「ええと……十八年、だったか」

私たちには忘れられない。十八年前にひどい大雨で土砂崩れが発生し、それに娘は巻き込まれた。懸命な捜索活動もむなしく、その二日後に娘は遺体で見つかった。見つかったとき、娘のすぐそばに花と手紙が落ちていた。ちょうどその日は家内の誕生日だったのだ。きつと早く帰るために、危険だが近道の山道から帰ろうとしたのだろう。

「そうね、私ずつとあの子の存在が私の中で大きかった。私の心の中のほとんどをあの子が占めていた。私はずつとあの時を悔やんだ。どうしてあの日に限って迎えに行つてあげられなかったのかって」

「おまえのせいじゃないだろう」

「分かっていますよ。でも、私の誕生日じゃなかったら、あんな道は通らないでしょう？ ずつと今までそればかり。あなたとも何十回とこんなやり取りを繰り返してきたか。でも、彼の話を聞いて思ったのです。彼が言っていた、『人は大切なものを失って初めて気が付く生き物だと言いますよね。でも僕が思うには、僕は彼女を失う前から大切に思っていたし、確かに彼女が逝つてしまつてから増々恋しく思うけれども、大切である気持ちはずつと変わらない。彼女がいてもいなくても僕の気持ちはずつと一緒なのです。彼女もどこかで僕を想ってくれている。もう泣き腫らすのはやめよう』という言葉を。これを聞いて、ああ、私も同じだつて。千花が私たちに残してくれた心温かい思い出、最期に千花がくれた私宛の手紙。千花もきつと空から見守っていてくれている。十八年経つてやつとこんなふうに思えたの。重たい母親だと思つてるんでしょうけど、それくらい大事な大事な一人娘なのよ」

なるほど、決心がついたとはこのことだったのか。

「それで、お前はやつと決心がついたって言ったのか」

「それもあるけど、もう一つ。うちの店でデザートにずっと出してきたレモンケーキを変えることよ。千花はレモンケーキが一番好きだったから、なんだか変えられずにズルズルと来ちゃったから、ここで新しい気持ちでまたスタートしようって思ったの」

「でもレモンを使うのは変えないんだな」

「そうなのよ。私もレモン好きですし」

「じゃあゼリーにしないか？　ゼリーの方が好きなんだけどな」

「嫌ですよ。ゼリーなんてあんなの冷やしたら終わりじゃない！　ゼリーってケーキとかタルトとかに比べたら、作り甲斐がないのよ。だから却下させていただきます」

「お願い！」

「嫌」

「お願いします！」

「無理です」

「一生のおねが……」

「あなた一生って使えるほど、この先長いの？」

「そ、そんなこと言ったらお前だってそうじゃないか！」

「な、失礼ね！　もう、早くしないとお客が来ますよ！　それ早く食べて準備してください。ほんと、うちのおっちゃんはお口インだから」

ふん！　と言って妻はキッチンへ行ってしまった。

「まったくどっちが失礼だよ」

言っておきながら思わず笑ってしまった。ここまで来ると、もう苦笑するしかない。私は皿に残っていた試作のデザートを口に入れて後を追った。

最後の一口のタルト・オ・シヨコラはちよつと酸っぱくて、ほん

のり甘かった。